# 火災リスク消滅から生み出すまちづくりプラン

## ―「地域づくりのダイヤモンド・モデル」の活用―

氏　　名　石丸　秀樹

指導教員　城戸　宏史

要旨

北九州市小倉北区の旦過市場は、「旦過地区再整備事業」が始動する矢先、2 度にわたる大規模火災に遭った。火災後、市場に魅了され、支援してきた人々は、「旦過市場」が地域活性化に欠かせない存在であることを実感している。では、なぜ、火災から旦過市場を守ることができなかったのか。消防士である筆者は、この火災を P.F.ドラッカーによる「すでに起こった未来」と位置づけ、類似する木造商店街密集地域に将来起こり得る惨事をどうすれば未然に防ぐことができるのか、研究を進めた。

旦過市場に類似する木造商店街密集地域の火災リスクを消滅させるための方法を探ったが、消防は、今ある状況をこれ以上悪化させないことを担う組織と言え、火災リスク消滅の視点で、その地域のまちづくりに参画し、より良い街へ変革させようという「改革」の手法は持ち合わせない。しかし、あえて、筆者は、消防士の視点から木造商店街密集地域の「火災リスク消滅から生み出すまちづくりプラン」を提案する。提案モデルは、北九州市の門司港レトロ地域である。地域内の木造商店街密集地域である栄町銀天街と門司中央市場の火災リスク消滅の提案を行い、そこに北九州市立大学大学院の城戸教授が提唱する「地域づくりのダイヤモンド・モデル」の理論を活用して、地域の活性化を考えていく。栄町銀天街を地域内の人々をターゲットにした「非基盤産業」的な商店街として発展させ、門司中央市場を地域外をターゲットにした「基盤産業」的なマーケット兼住宅地として生まれ変わらせる。このことによっては、「狙いを定めた定住者（人口）の増加」が図られることとなり、地域が活性化していくのだ。

この研究は、一見、関連性のない「消防士の視点」と「まちづくり」を掛け合わせて、考察を進めてきた。まちづくりには、俯瞰的にまちを観察する「鳥の目」、まちをじっくり歩き、足元を観察する「虫の目」が必要であるが、今回、そのまちの災害リスクを観察する「消防の目」もまちづくりに貢献できると実感した。想定外の災害が発生している現代、消防視点のまちづくりは、これからの時代に必要不可欠になるのだ。